

少年と秋の日

小川未明

青空文庫

もう、ひやひやと、身にしむ秋の風が吹いていました。原っぱの草は、ところどころ色づいて、昼間から虫の鳴き声がきかれたのです。

正吉くんは、さつきから、なくしたボールをさがしているのです。

「不思議だな、ここらへころがってきたんだけど。」
どうしたのか、そのボールは見つかりませんでした。お隣の勇ちゃんも、用事ができて帰ってしまったけれど、彼だけは、まだ、思いきれなかったのです。ボールがほしいというよりは、どこへいったものか、消えてなくならないかぎり、このあたりに落ち

ているものと思つたからです。

この広い原っぱには、ほかにだれも遊んではいませんでした。彼は、勇ちやんが、スパイクを買つてもらったら、自分もお母さんに買つてもらうお約束があるので、さつきも勇ちやんと、その話をしていたのでした。

「ね、君は、いつスパイクを買つてもらうの？」

「お父さんが、旅行からお帰りになつたら。」と、勇ちやんはいいました。

「君が、買つてもらったら、ぼくにも買つてやると、お母さんがいつたよ。」

二人は、早くその日のくるのが楽しみだったのです。

しょうきち

正 吉くんは、いまも、そのことを考えていると、ふいに、

「君、なにかさがしているの？」と、後方で、声がしました。お

どろいて振り向くと、知らない子が立っていました。

「りゅうのひげなら、あすここにたくさんあるよ。ぼくもりゅうのひげの実を取りにきたのだ。」と、知らない子が、いいました。

「りゅうのひげ？」

「ああ、りゅうのひげさ、君、まだ知らないの？」

「僕、りゅうのひげの実を見たことがないよ。」と、正 吉く

んはいいました。

知らない子は、先になつて駆け出しました。

「君、ここに、こんなになつてゐるだろう。」と、足もとのしげ

つた草くさの中なかをさしました。そこにも、冷つめたい秋あきの風かぜはあつて、細ほそくて長いひげのようくさな草の葉はを動うごかしていました。

なるほど、手てで草くさをわけてみると、濃こむらさき紫むらさきのちいさい美うつくしい実みが、重かさなり合あうようにしてなっていました。

「僕ぼくの妹いもうとが、ほしいというので、僕ぼく、さがしにきたのだ。」と、知らない子こは、いいました。

「君きみは、りゅうのひげの実みを取とりにきたのかい。僕ぼくは、ボールをなくしたので、さがしているのだ。」と、正しょう吉きちくんは、いいました。

「そうか、あつたかい。ないの？ 僕ぼく、さがすのは、とてもうまいんだぜ。」

知らない子は、りゅうのひげをポケットに入れて、それから、ボールをさがしてくれました。

「なんだ、ここにあるじゃないか。」と、さつき正吉くんが、いくら、さがしても見つからなかったところから、拾い出しました。

「君、キャッチボールをしようか。」と、正吉くんが、いうと、

「うん、こんどしよう。妹が、待っているから、早く帰らなければならぬよ。」

「君の家は、遠いの。」

「遠いけど、自転車に乗ってゆけば、すぐだ。君、いつしよに

遊び^{あそ}においでよ。」と、知らない子^こは、誘^{さそ}いました。正吉^{しょうきち}くんは、その子^こは、いい子^こだから、お友^{とも}だちになりたかつたのでした。

「どうしよかな。」と、ボールを握^{にぎ}つて、考^{かん}えていました。

「僕^{ぼく}、歸^{かえ}りに、送^{おく}つてあげるから、おいでよ。」

正吉^{しょうきち}くんは、ついにゆく氣^きになりました。その子^このそばに

は、真^まつ赤^かに塗^ぬつた二輪^{りん}車^{しゃ}が、置^おいてありました。正吉^{しょうきち}く

んは、知らない子^このうしろに乗^のつて、肩^{かた}につかまると、風^{かぜ}を切^きつ

て、風^{かぜ}のように、その自^{じてん}転^{しゃ}車^{はし}は走^{はし}りました。いくつかの、まだ

見^みたことのない森^{もり}や、まだ知^しらない道^{みち}を通^{とお}つて、やはり原^{はら}っぱの

中^{なか}に、五^い、六軒^{けん}あつた、その一軒^{けん}の前^{まえ}に止^とまり、庭^{にわ}の木戸^{きどぐち}口^あを開^あ

けて、二人は、入りました。

「ここが、僕の家だよ、あがりたまえ。」

庭には、はげいとうや、しおんのような、秋草が咲き乱れて

いました。中にも、うす紅色のコスモスの花がみごとでした。

縁側の日当たりに、十ばかりの少女が、すわって、兄さん

の帰るのを待っていました。その子は、病氣と思われるほど、

やせていました。しかし、目は、ぱっちりとして、黒く大きかつ

たのでした。

兄さんは、ポケットから、りゅうのひげの実を出して妹にやる

と、

「まあ。」といって、顔を上げて、喜びました。正吉くんは、

なんとなく、この兄きょうだい妹ななの仲のいいのがうらやましくなつて、自分じぶんもいつか微笑ほほえんで、二人ふたりのようすをながめていました。
「新しい、お友ともだちをつれてきたのだよ。」と、兄あには、妹いもうとにいいました。

「これから、ときどき、遊びあそびにきてもいい？」と、正吉しょうきちくんが、ききました。

「ええ、道みちをよくおぼえていて、いらつしやいね。」と、少女しょうじは、答こたえました。

三人にんは、その日ひのよく当あたる縁えん側がわで、りゅうのひげで、おはじきをしました。

あちらの壁かべに、海うみを描えがいた、油絵あぶらえがかかっていました。白しろい

鳥が、波の上を飛んでいました。正吉くんは、どこかで見たような景色だと思いました。あるいは、自分が生まれる前の世界であつたかもしれせん。そのそばに、マンドリンがかかつていました。

「あれは、マンドリンだね。」と、正吉くんは、珍しそうにして、指しました。

「わたし、マンドリンひけてよ。こんどいらつしやったら、きかしてあげるわ。」と、少女は、正吉くんの顔を見て、笑いました。

「あ、僕、もう家へ帰らなければ。」と、正吉くんは、急に、お母さんが迎えに出て、自分が見つからないので、案じていられ

る姿をすがため目に浮うかべたのです。

「今度こんど、キャッチボールをしようね。」と、知らない子こは、いいました。そしてまた、自転車じてんしゃのうしろに正吉しょうきちくんを乗のせて送おくつてくれました。雲くもの間あいだの夕日ゆうひは、赤あかかったのです。

「僕ぼく、君きみを呼よびにゆくときは、スパイクをはいてゆくから。」と、知らない子こが、いいました。

その夜よのことでした。

正吉しょうきちくんは、ふと目めをさますと、外そとのアスファルトの往おう来らいをカチ、カチと、スパイクの鉄てつを、石いしに打ちうつける音おとがしました。

「あ、あの子こがきた？」といって、飛とび起おきました。このようす

を見た、お姉さんねえが、

「正ちゃんしょうちゃん、いま時分じぶん、だれがくるものですか、耳みみのせいですよ。」といわれました。

「カチ、カチ、いうじやないか！ 姉さんねえには、きこえないの？」

「ほんとうだわ、見みましようか？」

二人は、窓まどを開あけて、外そとをのぞきました。澄すみわたった、月つきの光ひかりに照てらされて、さながら、水みずの中なかを見みるような往來おうらいを、一人ひとりのスパイクをはいた子供こどもが、駆かけていました。

「だあれ？」と、正しょう吉きちくんが、叫さけびました。

「正ちゃんしょうちゃん、僕ぼく！」

それは、意外いがいにも、勇いさむちゃんの声こえでした。

「勇ちゃん、どうしたの？」

「僕、スパイク買ってもらって、うれしいのだよ。」

そういった、勇ちゃんの声は、たしかに、うれしそうでした。

「まあ、いま時分、どうしたの？」と、お姉さんがいいました。

「お父さんが帰っていらったから、お母さんに買ってきてもら

ったのだ！」

「じゃ、僕も明日買ってもらう。」

ふたり少年は、月の光を浴びて、朗らかに笑いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「児童文学」

1935（昭和10）年11月

※表題は底本では、「少年《しょうねん》と秋《あき》の日《ひ》
《》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年と秋の日

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>